

第36号

(2019年4月1日発行)

発行: 中央大学学会 出版白門会

CONTENTS

(お名前は敬称略)

▽ 2019 年新年会報告	1
▽ 追悼	1
▽ 鳴神響一氏新春講演会 「職業作家への道を迎って……いま思うこと」 ……(丹田)	2
▽ 白門同窓生の本	3
▽ 「ホームカミングデーに参加して」; 白門 門オリビアンズ・クラブ ……加藤 守	3
▽ 出版白門セミナー「万引防止出版対策」 本部の活動と書店における万引防止の 弱点対策	3
▽ 第18回能鑑賞会に参加して…北村信治	3
▽ 第95回箱根駅伝復路ゴール応援報告	4
▽ 「学員交歓」	4
▽ 告知板	4
▽ 編集後記	4

出版白門会の関連行事予定

- ① 会報発行 4月1日
- ② 街歩き企画 5月ごろ
※詳細が決まり次第、HP と会員メールにてご案内いたします。
- ③ 第20回 出版白門会総会
7月19日(金) 18時30分～
会場: 出版クラブ(神保町) 4階
会費: 6,000円
※後日、出欠確認を兼ねたご案内をお送りいたします。
- ④ ホームカミングデー
9月29日(日) 後楽園キャンパス
- ⑤ 箱根駅伝予選会応援
10月12日(土) 9時30分
JR 立川駅東改札口前集合
- ⑥ 第19回能鑑賞会
12月14日(土) 12時開場 13時開演
会場: 国立能楽堂(渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1) /
JR 千駄ヶ谷駅より徒歩5分
狂言 柑子(こうじ) 善竹 彌五郎(大蔵流)
能 葛城(かつらぎ) 大和舞(やまとまい)
浅見 真州(観世流)
※「申し込み方法」「内容詳細」は10月発行
予定の第37号会報に同封する、申し込みチ
ランをご覧ください。

■ 行事に関するお問い合わせは、下記メールでご連絡ください。
E-mail: pub.hakumon@gmail.com
なお、上記行事のほか、皆さまの仕事に役立つ企画、あるいは懇親の企画を検討中です。

出版白門

● 出版界に出版白門の知恵と情熱を! ●

● 基本方針

1. 会員ニーズに応える活動による、会員満足度の向上
2. 中央大学、学会、他支部との連携強化
3. 会費徴収促進による、財政の健全化

2019 年新年会報告

1月25日、会員38名出席のもと、出版白門会新年会が開催された。会場は、昨年まで使用していた神楽坂の出版クラブが、ビルの老朽化に伴い昨年10月に神保町に移転した為、今回は真新しい出版クラブビルで初開催となった。第一部の新春講演会では、86年法学部卒で、「脳科学捜査官真田夏希」「謎二モマケズ」など幾つもの人気シリーズを持つ作家、鳴神響一氏を講師に迎え「職業作家への道を迎って……いま思うこと」と題し学生時代から公務員を経て、今に至るまでの起伏に富んだ半生と、物語の編み出し方など創作の秘密の一端が語られた。

第二部の懇親会は、風間会長より「書籍、雑誌とも売り上げ低迷が続き、

瀬戸際まで来ているが、出版物は絶対に無くならない。会員の皆さんでこの出版界を活気付けて戴きたい」との挨拶に続き、乾杯の音頭をとり、スタートした。

初参加者はいなかった為、ともに10数年ぶりの出席となる、有斐閣OBの望月さん、河出書房新社の七澤さんより、久しぶりに参加しての感想、近況を語って戴いた。続いて、恒例の新春ビンゴ大会、土屋会計監査の歌唱指導による校歌斉唱、エールと続き、最後に森副会長の中締めで名残を残しつつお開きとなった。その後、場所を映画「舟を編む」にも登場した人気の居酒屋「酔の助」に移した二次会も、多くの参加者で遅くまで盛り上がった。



講演会



風間会長挨拶



講師を囲んで



土屋さん指揮で校歌斉唱



二次会

追悼

■ 小関 道賢 元副会長 (2018.12.18 享年 88) 昭和 31 年 法学部卒

出版白門会の創設(2000年)から4年に亘り、副会長を務めて戴きました小関道賢氏が、昨年12月18日にご逝去されました。

氏のご功績を、平成15年定期総会時のご講演から、在りし日の小関副会長を偲ばせて戴きます。平成13年の9月、72歳にして半年間、上海交通大学に留学され、中国語を学ばれました。氏の勤務先「日販(日本出版販売)」は、20年にわたって、北京国家図書館へ21万5千冊、約8億円超に達する、我国の新刊図書を寄贈。そのご縁で、当時の日中友好協会の廖承志会長、中国友人のご支援があり、氏の強い意志と向学心に年齢制限60歳を超えて入学を許可され、見事初志貫徹し、期間満了優秀なるご成績にてご卒業なされました。講演の終わりに「72歳我が青春に悔いなし」と結ばれた。心からご冥福をお祈り申し上げます。合掌

出版白門会顧問 小竹 正倫

出版白門会ホームページアドレス <http://pub-hakumon.jimdo.com/>

facebook 出版白門会サイトへのアクセスは検索サイトの「出版白門会(中央大学学会職域支部)」から…

鳴神響一氏、職業作家への道を語る

本年の出版白門新春講演会は1986年中大法学部卒の作家・鳴神響一氏に「職業作家への道を辿って…いま思うこと」の演題でご講演をいただいた。

※以下、講演概要

1962年、当時はまだ回りに林があるような、都内では田舎だった杉並区の永福町で生まれた。少年時代は鎌倉の山の中で育った。子供の頃から立ち続けるのも座り続けるのも苦手。スキップも、逆上がりも、ハーモニカもできず、教員からはダメな子と言われ、いつも苦しい思いをしていた。それが「発達性協調運動障害」という障害であると知るのは後の事である。

中学時代は深夜放送にはまり、寝不足の毎日。熱心に聴いたDJ番組やラジオドラマは今の仕事に繋がっていると思う。深夜放送をきっかけに音楽に目覚めジャズが好きになり、ブラスバンドにも入る。高校では放送部に入り、ラジオドラマのシナリオを書いたり、録音・編集などをしたりで、まじめに勉強しなかった。そんな中で小説への興味も芽生え、同時に旅にも出かけるようになり民俗学にも興味が出た。その結果、文学部を中心に受験したが合格しなかった。一方、ジャーナリストへの興味もあり、新聞界などに進んでいる卒業生が多かった中大法学部に入学する。しかしある講義にがっかりしたことから、多くの講義への興味が失せ、他大学と合同の映像サークルを作ってビデオで芸術作品を作ることにエネルギーを注いだ。社会人になったとしても何をやっていいのかわからずに就活を迎えた。

大した準備もせず就活をした結果、受けた民間企業のすべてに落ち、翌年の就活を考え、意識的に留年した。そのころ、ある出版社の旅行ガイドのバイトの仕事が入り、フリーライターとして秘湯の宿を回って取材の仕事を経験した。就職への気持ちが固まらないその頃、友人から公務員を受ける事を勧められて受験する気になった。だが、バイトの仕事を引きずって夏に試験に間に合わず、10月に試験があった学校事務職員に採用され、地方公務員となった。収入は安定したが、何をしたいのかまだ良く分からなかった。

学校という職場は楽しく、結果として28年在職することになった。学校現場には一年中小さなドラマがあり、飽きない職場だった。仕事は総務、人事、経理等で気が抜けない仕事ではあった。一方、自分にとってすごく楽しかったのは、出世の事を考える必要がまったくなく、誰にも指図をされない職場だったことだ。

しかし、公務員になっても失職への不安は抜けず、行政書士と社会保険労務士の二つの資格を取った。これで安泰と気が楽になったせいで、その後の15年くらいは、秘湯の宿に200泊、キャンプで100泊などあちこちに旅した。また、先輩のクルーザーにクルーとして乗り込んだり、陶芸好きが高じて陶芸家を訪ねたりなど

していた。さらに、コンピュータ・ミュージックの編曲や、フラメンコのステージの鑑賞など、さまざまことを経験して日々を過ごした。人生の大きなビジョンが見つからず、ただ日々を遊んで過ごして来た40歳だった。

そんな中、転機になったのが病気だった。首に違和感があり医者に診てもらおうと、悪性リンパ腫瘍との診断。築地のがんセンターを紹介してもらい、通うようになる。死を意識せざるを得なかった。

検査を次々に受けていくうちに「悪性ではなさそう」と診断が変わる。御茶ノ水の東京医科歯科大学に転院し再検査の結果、良性の神経鞘腫と分り手術をした。

大病をすると自分と向き合う。「ここで人生が終わったら後悔する。本当に自分がしたいことは何なのだろう」と考えた。振り返って見ると本気で何も取り組んで来ていない。残りの人生を本気で考えたときに、見つけたものが小説だった。自分は小説が書きたかったのだ。

一作目では、誰しも勘違いするように自分は天才で、すぐに大物デビューと思いこんだ。だが、新人賞に応募しても9年間落選続き。自分を全否定された感じになり、辛くて何度も止めようと思った。「止めて何をやるのよ」と自問したが、小説のほかに本気で立ち向かえることが見つからなかった。

2014年、51歳になった時に「大きく舵取りをするのはここだな」と思った。仕事があり、収入があり、生活が安定した中でこの投稿は甘えがあると思った。今ここで舵を切らなかつたら一生このままだと思い、リスクをおかして仕事を辞める。

10月に学校に辞めると告げた時には、何の賞にも残っていなかったが、2014年の3月15日に角川春樹小説賞の最終候補の連絡をもらった。4月1日から無職になるが、5～6年は退職金で何とかできるので、退職金を食いつぶすまではチャレンジしよう。それでだめなら諦めようと思っていたが、ありがたい事に5月15日に角川春樹小説賞受賞の連絡を頂き、『わたしが愛したサムライの娘』でデビューでき、作家としてのスタートラインに立った。

『脳科学捜査官 真田夏希』シリーズは警察小説、『多田文治郎推理帖』シリーズは本格ミステリー時代小説、『おいらん若君 徳川竜之進』シリーズは痛快時代小説、『斗星、北天にあり』は歴史小説と、幅広い分野で小説を書いている。

これは自分が遊んでばかりいた事の成果だと思っている。例えば『多田文治郎推理帖』シリーズの中の万古焼のテーマは、遊んでいた時代の焼き物趣味が生きている。『鬼船の城塞 南海の泥棒島』は海洋冒険小説だが、ここではヨットに乗って遊んでいた経験がプラスになっている。旅をしたことは、風景描写に役に立っている。遊んでいた経験が役に立つのは不思議な仕事だと、最近痛感している。



具体的にどんな物語を書こうかと言うのは「ふっ」と来る。立ち上がった時、シャワーを浴びた瞬間とかに、いきなり物語の枠が出る。意識下のものが意識に上ってくる。そのままでは思いつきに過ぎないが、そこから論理的に組み上げる。さらにどんな登場人物にするかのキャラ立てが続く。『脳科学捜査官 真田夏希』の場合は、専門知識を持った人物を準キャリアの特別枠で採用する特別捜査官制度が実在する。制度の中で心理捜査官として採用されたという設定でキャラを作った。臨床心理学の専門家、精神科医の友人からいろいろな知識を教えてもらっている。

学校事務職員時代の在籍校に、特別支援学級があったことも発達臨床心理学へ関心を持ったきっかけであった。大学院派遣制度で発達臨床を専攻した友人を講師に据えて勉強会を作り、若い教員たちと一緒に学んだ。作品の中で活かせたと思っている。

小説で大切な場面の立ち上げは、妄想、瞑想から生まれることが多い。部屋を暗くして、ベッドに横になり半分寝ているかわからない状態で妄想を重ねて創り上げた場面はできがよいことが多い。登場人物の感情曲線はそれぞれの人物に感情移入することが必要のように思う。

ちなみに、グットエンドかバッドエンドかと言うと、グットエンドしか書けない。

小説を描き続けるのは、自分はいかにやりたいことも、やれることもないからなのかかもしれない。テキストにこだわるのは、受け手の皆様の脳内での妄想と違う妄想を持ってもらうのが楽しいから。

私が職業作家であると断言してよいかはわからない。作家とはデビューしてなれるものではなく、段々になっていくものではないか。職業作家となるために頑張り、これからも物語を出し続けたい。

鳴神氏のご講演を拝聴し、無駄なようで無駄な経験と言うのは無いのだと思った。そして、氏の小説の中でも語られている「因縁生起（この世は縁で動いている）を痛感した。

先生の益々のご活躍を出版白門会としても応援して行きたいと思います。

(広報委員 丹田)

【白門同窓生の本】 阿部信行組織委員、著者になる！！

『HAPPY ふくろう』

荻原正江・阿部信行著
(里文出版 2018年)

業界の名物営業ウーマンであった荻原正江さんが半世紀にわたり私的に集めた“ふくろうグッズコレクション”2000アイテムから約600点を厳選し収録した珠玉の

ふくろう写真集。荻原さんとは旧知の間柄である阿部委員が音頭をとり企画がスタート。構成をまとめながら、阿部委員自身も取材し「ふくろうの知識アラカルト」を執筆した。癒しの一冊、幸運を呼ぶ一冊として好評発売中。

(B5変・136p、本体2,300円
ISBN978-4-89806-470-2)



「ホームカミングデーに参加して」；白門オリンピックズ・クラブ

本会の会員でもある私にとってこの原稿依頼は一寸心苦しい。しかし標記クラブのメンバーには本会会員数名が入っていることもあり紙面の一部を埋めさせて頂く。



クラブは2018年7月に発足。勿論ホームカミングデーへの参加は考えてもいなかったが、大学・学会の好意で参加実施することになった。

テーマは「オリンピックを知ろう」そしてシンポジウムをメインに講師には渡辺長武('64東京オリンピック大会レスリング金メダリスト)・木崎正子(同大会陸上競技800メートル出場選手;現藤本)氏を招きコーディネーターを私が。

会場はOB・OGをはじめ日本スポーツ界の役員(慶応OB)ら、更に竹林氏らの協力もあり、各年次会員の出席などで部屋は椅子が足りなくなるほどの盛況であった。

出席者からは「嘗ての中大スポーツの栄光はどうなっているのか?」「スポーツは今

や学際的なものである」など多様な意見・質問があり盛会裏に終えることができた。

(オリンピック・アカデミー理事)
加藤 守(写真 利根川伸行)



出版白門セミナー

2月19日(火)18時30分より、出版白門会会員14名、会員外参加者13名、業界紙3名が参加して、中央大学駿河台記念館において「万引防止出版対策本部の活動と書店における万引防止の弱点对策」というテーマで出版白門会主催の出版セミナーが開催された。

セミナーの第一部では、万引防止出版対策本部事務局長の阿部信行氏が万引問題の現状を各種データを基に解説し、合わせて



同本部のこの一年の活動を報告した。第二部では新入社員やパート、アルバイトのためのロスプリベクション教育用ビデオの上映を行い、第三部では株式会社ウヰリカジャパン代表取締役で書店の万引防止の指導に長年かかわってこられたコンサルタントの豊川奈帆氏が、書店現場における万引き被害の実態とそれが書店経営に与える深刻な状況を数値をもって解説した。万引きの実態については、例えば高齢者による万引率が、青少年に比べて統計上は急増しているように見えるが、青少年は逃げ足が速く、捕まることが高齢者に比べて少ないから、統計だけを見て判断すると実態とずれると言った話もあった。また、監視カメラなど、防犯機器がある所ほど店員が機器に頼って油断しやすいので万引きがやり易いと言った、意外な事実も報告された。

今後の対策としては、社員教員の充実は当然のこととして、地域書店間での万引き常習者の情報共有、書店による共同防犯プ

ロジェクトの促進、警察との連携、万引き被害に対する損害賠償請求制度の普及などが提起された。

最後に質疑応答があり、参加者からは踏み込んだ、具体的な質問も出されて、この問題への関心の大きさを改めて認識させられた。セミナーを通じて、具体例による実態報告と捕捉に係る留意点や法的問題が解説され実践的なセミナーとなった。



【第18回 能鑑賞会に参加して】

北村 信治

師走に入った12月8日(土)、恒例の能鑑賞会が開催されました。

会の発足と回を重ね、今年は18回目を迎えました。

内容は

狂言 文相撲(ふずもう)
善竹 忠重(大蔵流)
能 経正(つねまさ)
替之型(かえのかた)
角 寛次朗(観世流)

でした。

京都・仁和寺御室御所に仕える行慶(ぎょうけい)僧都は、法親王の命により、一の谷の合戦で討ち死にした平経政(経正)(たいらのつねまさ)を弔うこととなりました。そこで琵琶の名手として知られた経政が愛用した青山(せいざん)と

いう銘の琵琶を仏前に据え、管弦講を執り行う…そんなストーリーです。

例年の能の内容に比べて「軽い」「テンポが速い」そんな感覚を味わいました。

鑑賞後は場所をレストランに移し、懇親会を行いました。お気づきの方もいらっ



しゃると思いますが、

今回は「能と言えば…白石さん」の白石さんが体調不良で初の不参加という、会にとっては一味違った一日になりました。当日のマネジメントを白石さんに変更丹田さんが務め楽しい懇親会になりました。



【第95回箱根駅伝復路ゴール応援】

好天の中、正月恒例の箱根駅伝があり、復路大手町ゴール付近の応援団前にて応援を行いました。

往路1区中山選手(法4)・2区堀尾選手(経4)は自宅のテレビでの観戦になりましたが、まさかの上位集団に「中大」が名を連ねていました。このままのペースで襷が繋がれば…「シード権が取れる！」そんな期待を持った方も多かったのではないのでしょうか？近年の箱根駅伝参加校の実力がかなり上がっている中、神様は我々中央大学の味方になってくれず、結果としてシード権まであと「1分16秒」で11位。

10区ゴール直前では、川崎選手(経2)は後ろから追ってくる早稲田大学の小澤選手をかわし「意地」を見せてくれました。

競争が終わり、応援団前に選手・藤原監督・野村部長らが一堂に会し反省会が行われました。

藤原監督は「指導不足を真摯に受け止めたい。シード権奪取に向けた1年だった。選手たちは頑張ってくれた。今年も予選会

からのスタートだが、来年は皆で笑える正月にしたい」と意気込みを語っていました。「1分16秒=76秒」という明確な目標に向かって我々OBも全力で応援します！

(広報委員 北村)



学員交歓

■去る2月2日(土)、中央区立社会教育会館8階ホールにて「第11回幸兵衛会(落語会)」を観賞してきました。

♣私も所属していた中央大学落語研究会出身の3人の噺家による落語会です。

中大落研は今年で創部62年になりますが、OB・OGは日本各地に約350人、その内現在年会費を払っている120人がOB会のはくらく会に登録されています。

当日ははくらく会会員のほか、出版白門会をはじめ年次支部など多くの白門会関係者に数多くお集まり頂き、会場は熱気と笑いに包まれました。

3人の噺家とは、桂やまと師匠(14年3月真打昇進)と春風亭三朝師匠(17年3月真打昇進)、そして紅一点落語会の美形No.1林家つる子さん(15年11月二ツ目昇進)です。

中大出身の噺家さんには、笑点で有名な林家三平師匠や、出版白門会で講演をお願いしたことのある柳家小団治師匠や、7ヶ国語を駆使する国際派三遊亭竜楽師匠などがいらっしゃいますが、中大落研出身の噺家さんとなるとこの3人しかいません。

この3人の経歴・流れを、私は勝手に「正常ルート」と呼んでいます。

なお、「第12回幸兵衛会」は来年2月1日(土)に深川江戸資料館小劇場での開催が決まりましたので、是非とも皆様の参加をお願いいたします。

森岡憲司



■中央大学商学部(経営、経済部門)学生からの発表会に参加して(OB向け商学部ゼミ連プレゼンテーション)

北村信治

♣2月9日(土)10時から、駿河台記念館にて「2018年度商学部ゼミ連プレゼンテーション優秀賞OB向け発表会」がありました。このOB向けイベントの企画は学員会年次支部協議会・大学学員交流部が主催され、昨年に引き続き紹介をいただき参加いたしました。

内容は

●中央大学商学部 本庄裕司ゼミの学生の皆様2チーム

「都道府県所得と人口移動」

「クラウドファンディングにおける動画掲載がプロジェクトの成功に与える影響の実証分析」

●中央大学商学部 酒井正三郎ゼミの学生の皆様2チーム

「日本におけるキャッシュレス社会到来の可能性…中国を参考にして」

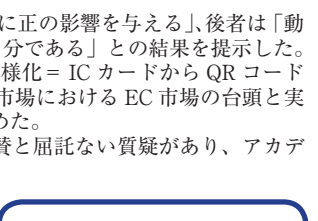
「中国小売市場における実店舗の可能性」

があり、各内容20分程度のプレゼン+質疑応答という形で進行しました。

本庄ゼミは「統計分析」を活用しての説明を行い、前者は「転入先の都道府県県民所得格差が大きいほど、人口移動に正の影響を与える」、後者は「動画の掲載は、クラウドファンディングの達成率、達成金額、成功において正の影響を与え、その最適な時間は2.6分である」との結果を提示した。

酒井ゼミは、社会的にはアプローチで「商品を買ひ、お金を支払う」という基本的な概念から「支払い方法の多様化=ICカードからQRコード決済への進化が来る東京オリンピック時の来日する外国人へのサービス向上に寄与する」と提言。そして「中国市場におけるEC市場の台頭と実店舗の今後の可能性として、実店舗がもつ「実体験ができるメリット」を生かし共存して行くであろう」とまとめた。

4つのテーマは我々が普段気づくことの薄い内容を学生目線で分析し紹介していることに参加した学員からも賞賛と屈託ない質疑があり、アカデミックな一日となりました。



告知板



■2023年、法学部が文京区の新キャンパスに移転決定!

文系学部の1つである法学部の「都心回帰」がいよいよ実現します。地下鉄丸の内線茗荷谷駅前の敷地に「グローバル・リーガルマインド」を掲げ始動します。

■新春の箱根駅伝復路2区(花の2区)で素晴らしい走りをした堀尾謙介選手(経済学部4年)が卒業間近の「東京マラソン(3月3日)」にて2時間10分21秒(5位・日本人トップ)で初マラソンながら好成績を得ました。

この「東京マラソン2019」は、2020年の東京五輪の出場選手を決めるための大会(マラソングランドチャンピオンシップ)の出場権がかかるレースでもありました。新学員として来年のオリンピックでのメダル獲得へ期待が膨らみます。

■①出版白門会ホームページのご案内

アドレスは <http://pub-hakumon.jimdo.com/> です。Google や Yahoo といった検索サイトで「出版白門会」を検索すると上位にヒットしますので、そこからのアクセスも可能です。

②出版白門会事務局へのご連絡は下記メールアドレスをご利用ください。

E-mail:pub.hakumon@gmail.com です。

■会費納入のお願い(年会費金額¥5,000)

①同封の振込用紙にて、もしくは下記口座へお振込みをお願いいたします。

郵便振替口座番号 00180-8-600659

加入者名 中央大学学員会出版白門会

振込用紙がなくても、直接郵便局の窓口やATMでも手続きができます。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ゆうちょダイレクト(パソコン、携帯、スマホなど)もご利用いただけます。

②他行(銀行など)からの振込みをされる場合は下記口座をご指定のうえ、手続きして下さい。

ゆうちょ銀行 当座預金

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)

口座番号 0600659

口座名義 チュウオウダイガクガクインカイシュツパンハクモンカイ

出版白門会は皆様の会費のみで運営しております。ご協力のほど何卒よろしくをお願いいたします。

編集後記

1月も半ばを過ぎたあたりに、所属するもう一つの職域支部の賀詞交歓会がありました。交歓会に先立ち、講演会がありました。

講師は白門同窓で知らない方はいない、元経団連会長のキヤノン株式会社代表取締役会長の御手洗氏。「激変する国際情勢と日本経済の指針」という、日本が喫緊に直面する課題を分かりやすく説明いただきました。また、リーダーたるもの、

・当事者意識を持つ
・対話と傾聴力が、大切
・目標は、自分で立てて実行する
といった大先輩ならではの格言をいただき、感激しました。

「他人事」が世間に蔓延している中、「当事者意識を持つ」という、物事を正面から見据える心、大切にしたいです。(北村)